

消灯されたフロアに、キーボードを叩く音だけが残っていた。定時を三時間過ぎたあたりで、ようやく最後のデータを保存する。背もたれに体重を預けてから立ち上がると、デスクの向こうで泰剛がちょうどジャケットを羽織るところだった。

「先輩、お疲れ様でした。今日、資料の件ずいぶん大変そうでしたね」

軽い足取りでこちらへ向かってくる。整った顔立ち、いつでも笑ったような目元。僕のデスクの前を通るとき、散らばった印刷物をさりげなく揃えて置いていく。そのくせ、「先輩って片付け苦手っスよね」とにこにこ顔で言い添えるのも忘れない。そういう、憎めない後輩だった。

「ありがとう。泰剛もお疲れ様。課長から言われた新しい企画どう？」

「ばっちりっスよ！ まあ、先輩に前もって相談していたおかげっスけど」

「またまた。泰剛が優秀なだけだよ」

「えー、やだなあ先輩、照れるじゃないっすか」

新卒で入ってきたのが去年の春。仕事を覚えるのが早くて、ミスをすれば素直に謝って、先輩には必ず「ありがとうございます」を忘れない。

朝、コーヒーを買いに行くついでに「なにか要りますか」と声をかけてくるし、会議の前には「資料、追加で準備しましょうか」と聞いてくれるし、こんな時間まで残業している僕を見ても、じゃあ俺も、と当然のように残って外部連絡の整理を引き受けていた。

口調は軽いが、仕事は丁寧で抜けがない。おまけに顔がいい。他の先輩たちにも一様に可愛がられている、よく出来すぎた後輩だ。

(自分でわかってやってる節もあるよな……)

そう思いながら、僕はバッグを肩にかけた。

「先輩、終電、大丈夫っスか？」

「え、ああ……。ちょっと、ぎりぎりかな。急ごう」

並んでエレベーターへ向かう。夜のオフィスは足音がよく響いて、革靴が二人分、交互にタイルを打つ。

泰剛の歩幅は僕より少し大きいのに、いつもさりげなく半歩さげて合わせてくれる。今夜もそうだった。雑談も、声のトーンも、僕の横に立つ距離感も。廊下の非常灯が二人分の影を伸ばして、それだけがやけに静かだった。

やがてエレベーターの扉が開いた。そこに二人で乗り込む。

「今週もお疲れっした」

「泰剛もね。遅くまでありがとう」

ボタンを押す。一階。数字が一つずつ減っていく。二十一、二十、十九。泰剛は扉の横に寄りかかって、スマホを確認するでもなく、ただぼんやり前を見て

いた。

閉じていく扉を眺めながら、ふと息をついた。

(早く帰ってシャワー浴びて寝よう)

普段通り、それまでと、なにも変わらなかった。

けれど、二十三階と一階のちょうど中間あたりでエレベーターが止まった。衝撃もなく、音もなく、ただ静かに。

「えっ!？」

僕は思わず扉を見た。当然、開かない。

数秒の沈黙のあと、スピーカーから無機質な女性の声が流れた。

「ただいま点検中です。しばらくお待ちください」

天井の表示が切り替わる。蛍光オレンジの文字で、点検中と表示される。密閉された空間がいきなり重

くなった気がした。

「点検中、って……。なに？ 故障？」

「どうなんスかね。とりあえず非常ボタン押してみ
ましょうよ」

泰剛が迷わず壁面のパネルへ向かい、非常通話ボ
タンを押した。

ブッ、と発信音がして、数秒後に応答が返って
くる。

「はい、ビル管理センターです」

「すみません、二十三階と一階の間でエレベーター
が止まってしまってます」

いつもの軽い口調が、このときだけ少し落ち着いた
声になる。こういうときも、頼りになる後輩だ。

（僕一人だけだったら、パニックになっていたかも
……）